

輝やけ我が命の日々よ

西川喜作

新潮社版

輝やけ我が命の日々よ

西川喜作

宣告された精神科医の
1000日

かが
輝やけ 我が命の日々よ

—— ガンを宣告された精神科医の1000日

一九八二年一〇月一五日 発行
一九八四年八月一五日 一六刷

著 者 西川喜作
（にしがわきさく）

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—二六六—五一二一

（編集部） 03—二六六—五四一一

振替東京四—八〇八

印刷 東洋印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

定価 九八〇円



© Ikuko Nishikawa
1982, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信保宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-343401-5 C0047

輝やけ 我が命の日々よ * 目次

西川先生のこと——柳田邦男

5

年賀状 17

1. 発病 —— 微かな不安が現実になって

尿閉 19 予感 24 厳粛な事実 31

2. 入院 —— 病いに負けてはいられない

『チベットの帽子』 38 ステージC 46 転院 53

3. 手術 —— 患者の立場から確立したい「死の医学」

サイクロトロン治療 60 忌わしい宣告 68 中性人間 74

4. 転 移 — 区切られて知った命の素晴らしさ

恐れていたもの 77 悟り 83 手紙 87

5. 精神科医 — 私の生きがい、私の愛する仕事

学会 93 抗ガン剤 102 決意 107

6. 家 族 — 植木職人だった父の子育て法

生いたち 114 あとに遺すもの 122 春 127

7. 思い出 — 五十年を生きて初めて辿る自分の足跡

単独行 133 伊那再訪 139 スリランカからの手紙 146 再会 152

8. 運 命 — 正月は、死の影を濃く感じる時

死亡挨拶 158 見舞い旅行 164 取材 168

9. 増殖

——今日を、この今を精一杯生きよう

疑い

177

医学的事実

183

再び放医研へ

191

10. 生きる

——そと妻の顔をなで、手を握る

暑い夏

197

左眼失明

203

CTスキャナー

208

口述筆記

219

西川先生のこと

―序にかえて

人生の出会いというものは、ほんとうに不思議なものだと思う。

私が人間の生と死という重大な問題について教えられることになる西川喜作先生を知ったのは、先生からの手紙によってだった。昭和五十四年十月のことである。

たまたまその月に発売された月刊誌『文藝春秋』十一月号に、私は、「ガン 50人の勇氣」という作品を書いていた。この作品については、多くの読者から手紙をいただいたが、その中に、西川先生の手紙があつたのだ。

手紙は、横野の公用箋四枚に、びっしりと書かれた、かなり長文のもので、私の心をとらえて離さない必死の思いをこめた文章で綴られていた。後で知ったのだが、その手紙は西川先生が個人的な秘書に清書させたものだった。

書き出しは淡々としていたが、十行も読み進まないうちに、西川先生がどのような状況に置かれているかが、はっきりと伝わってきた。そのいわば「自己紹介」ともいえるべき部分は、次のように書かれていた。

へ小生は国立千葉病院に勤務する精神神経科医です。本年初めより排尿困難が漸次進行していましたが、学会、研究、教育及び毎日の診療に追われるうちに、三月中旬酒を飲んで、全く尿閉をきたし、初めて同僚の診察を受けました。既にその時にガンではないかと感じてはいましたが、造影剤の不規則なレントゲン写真やその他の所見から、ガンであることを自ら認めざるを得ませんでした。

しばらく家族にもかくし、四月に入り、入院治療を始め、高見順先生の亡くなった放医研では、サイクロトロンの治療も幸運にも受けさせて頂きました。前立腺ガンのため、四十八歳にしかないこの私ですが、その後、辜丸摘出を行わなければ再発の可能性があるといわれ、再び人にはいいつくせぬ葛藤の末、六月末手術を受けました。その後はホルモン治療、免疫治療を続け、七月より直ちに、私の意志で、社会復帰のため、半日勤務をし、九月からやっと全日勤務に戻れました。

ところが、十月になって定期検査の結果、左大腿骨股関節に転移が起き始めているといわれ、十月十五日に千葉大学病院泌尿器科に入院することが決まりました。……

転移による再入院となると、先生は大きなショックを受けているに違いない——私は、そう思いつつ読み進むうちに、なぜ先生が私に手紙を書いてくださったのかを理解することができた。

先生は、入院した日に、私の「ガン 50人の勇氣」を読まれ、その感想を私に次のように

伝えてくださったのである。

へ入院した夜、一気に私は貴殿の書かれた文章を読ませて頂いたわけです。……『たとえ世界が明日終りであっても、私はリンゴの樹を植える』というゲオルギウの文章は、ガンが宿ってガンとわかった時以来、私の気持に似通ったものがあり、深く胸をうたれました。国立がんセンター研究所長の杉村隆先生の『死とは、その人の人生が短期間に integrate (インテグレート、集積) されて出てくるものではないか』という言葉は、私の心をこれ程強く打ち、励まし、力づけつつあるものではありません。

私は精神神経科医として、千葉の片隅で静かに己が運命のゆくまゝに、神の摂理に従って、その終りを素直に待てばいいと考えていました。しかし、五十人の方々のガンに対する生き様、死に様を知らされて、私に無かった数々の経験や精神的葛藤、死を前にしての素晴らしい輝きの一瞬の光、そして又死を迎えながらライフワークの実現に、完成に、全力を振りしぼって来た方々の姿を素直に読ませて頂いて、小生の喜びは、まさにつきるところなく、貴殿に深く深く感謝します。(中略)

残された私の時間、人生の経験を integrate しながら、最善をつくしたいと決心しています。……

手紙は、西川先生が、ガンという病をどのような経過の中で自覚され、残された人生をどのように生きようと決意したのかを、ほとんどいいつくしていた。

私は、この手紙を読み返す度に、西川先生こそ、最後までリンゴの樹を植え、水を注ぎ、果実を結ぶようにと願い続けた人だという感を深める。先生の最期の日々こそ、先生のかげがえのない人生が密度濃くインテグレートされたものではなかったろうか。

その日々がどんなものであったのか——それがまさに本書に書かれている事柄である。

私が西川先生と度々お会いしたり電話で話したりするようになったのは、最初の手紙をいただいてから一年以上経った昭和五十六年の早春の頃からだった。それは、先生にとって、ガンの転移が速度をはやめようとしていた時期だった。先生は私に対し、闘病について、生と死について、若かった頃のことについて、さまざまな話をしてくださった。

そのうちに脊椎転移がやってきて、激しい腰痛に襲われるようになった。

しかし、西川先生は、病床に独り臥しているよりは、車椅子を使ってでも、患者さんの診療に尽す道を選んだ。暑い夏になって、先生は、視力の衰えを自覚しつつも、なお国立病院の外来に出て、一日に三十人も四十人も患者さんの診療にあたったばかりか、夜になると、長年にわたって千葉市内の医院を借りて続けてきたナイトクリニックの診療も行っていった。ナイトクリニックは、社会復帰した患者さんたちが、勤めを休まずに通院できるようなというねらいで開いていたもので、そういう窓口を設けることは、精神科医としての西川先生の若い頃からの信念だった。

「患者さんが待っているから」

というのが、西川先生の口ぐせだった。

ナイトクリニクは、視力の衰えによって遠近感がとれなくなり、車の運転ができなくなるまで続けていた。

どれだけ多くの心を病む患者さんたちが、先生によって救われたろうか。

そういう先生の生き方を見ていて、私は、先生のエネルギーはいったいどこから湧き出してくるのだろうか、しばしば思ったものである。もともと、白衣を着た先生の外見上の姿からは、悲愴感とか切迫感といったものは、全く感じられなかった。患者さんに接するときは、いつも物静かで淡々としていたし、国立病院の同僚の医師や看護婦たちに対しては、いつものようにざっくばらんな口のきき方をしていた。何も知らない人なら、先生が残り少ない日々を過ごしているなどは、想像もできなかったであろう。

西川先生が挑んでいたのは、診療活動を全うすることだけではなかった。ガンとわかって以来、大判の大学ノートに詳細な日記を記すとともに、多くの人々に長文の手紙を書いていた。そうすることによって、自分の刻一刻の生を確認しようとしているかのようにだった。

そこで私は思い切って、先生に、闘病日記を一冊の本にまとめてはいかがでしょうとすすめてみた。先生は、すでに先輩の医師からも、同じようなすすめを受けていたというところで、すぐに執筆にとりかかることにした。すでに綴ってきた日記は、公私にわたってあらゆること書きこまれているので、あらためてまとめる本は、そのままではなく、一人の精神科医として自らの闘病を見つめるという視点から、新たに書き起こすことになった。

最後の年となった昭和五十六年の五月から七月にかけての約三カ月間、先生は何かに憑かれたように執筆に専念した。毎朝七時には国立病院に出て、勤務の始まる九時近くまで、医局のデスクに向かつて、猛烈な勢いで原稿用紙にペンを走らせた。朝五時に起きて、自宅で出かける間際まで書く日も少なくなかった。執筆のスピードは、二百字詰原稿用紙で一日三十枚から四十枚にも達した。

そして、七月下旬に、先生はいったん脱稿した。二百字詰で千数百枚の原稿は、新潮社出版部の編集者に手渡された。八月に入ると、追加分として口述筆記が行なわれた。先生自身の原稿と口述筆記は、出版部でさらに整理され、十月十八日夜、編集者によって先生の手もとに届けられた。それは、先生が息を引きとる四時間前だった。先生は、ほとんど昏睡状態に陥っていたが、「先生、原稿ができたのです」という私の声がわかったのか、かすかに微笑んだ。

私は、何という力強い人生のインテグレートの仕方かと、胸に迫るものを感じた。

西川先生は、ガンとわかってから、「死の医学 (Thanatology サナトロジー)」に強い関心を抱き、死に関する書物や闘病記、あるいは限界状況下の人間に関する書物などを、つぎつぎに読んでいた。そして、「死の医学」というテーマで本を書きたいという構想を抱いていた。

各地の大学や病院での講義や講演にも情熱を注いだ。「死の心理と医療」というテーマだった。講義や講演で、先生は、こう語った。

「現代の医学において、生については産科学や乳児学があるのに、誰でもが直面しなければならない死に関する医学が、ほとんど顧慮されていないことに、私は疑問を感じるのです」

そういう問題意識を、先生は、文献学的ではなく、自らの体験的エッセイ風に語っていた。

先生はついに「死の医学」の本を執筆できなかったが、そのスケッチともいうべき短い所感を、「死と医療のあり方」という題で、『日本医事新報』（昭和五十六年四月二十五日号）に寄稿していた。その中に記された次のような部分は、先生の問題意識を端的に表現している。

「我々は善意からでている疾風のような能率主義とスピード化にあらためて心をいたし、むしろ患者の手を握り、ほほえみかけ、患者の小声の言葉、また言葉にならない言葉に耳を傾けるべきだ。

病が重くなると、患者は意見を述べる権利はないものの如く取り扱われ勝ちだが、これは違う。重篤の病人でも、感情を持ち、希望と意見を持っていることを知らなければならぬ。何よりも大切なことは、その患者の権利のあることを、我々医療者は忘れてはならない」

（私達は現代のようなクリオソサエティ（寒冷社会）に代って、死と死ぬことの問題を自由に取り扱い、温い社会を発展すべきである。そして今は禁句となっているこの主題につい

ての対話を奨励し、すべての人々が死ぬまでの最後の数カ月か、数週間を恐れることなく生きられるように、彼等を助けるべきである。それにはお互い自らの人格を高めなければならぬと思う」

私はいまにしているのだが、西川先生が最後の三カ月をかけて書き遺した本書は、先生が構想を抱いていた「死の医学」の「序章」の位置づけをもつものではなからうか。それは「序章」ではあっても、西川先生自身の生と死が命がけのペンの運びによって刻まれているがゆえに、生きることと死ぬことについて、あるいは現代の医学について、重要な問いかけを表明している。しかも、根底にいつも、精神科医として自らの心の動きまでも見つめる冷静な眼がある。

西川先生は、母校千葉大学医学部の講義の中で、若い頃に読んだフランクルの『夜と霧』を病を得てから再読した感想を述べていた。先生は、何十万何百万というユダヤ人が、ナチス・ドイツによって次々にガス室に送られていたあの強制収容所において、明日をも知れぬ極限状況に置かれながら、なお希望と愛の火を消さないでいる情景を描いている部分を取り上げ、「その情景の意味を自らがガンになってほんとうにわかるようになった」と、述懐していた。

若い頃には、大量虐殺の記録という面のみから、何気なく読み過ごしていた部分に、実は人間の生と死に関して重要な示唆が含まれていたのに気づいたというのである。おそらく先生は、死に直面しつつも、希望と愛の火を消さないで一日一日を生きていた人々の姿

に、激しく心を動かされ、自らも残された日々の中から「希望」という字を消すまいと決意したに違いない。その「希望」とは、一日一日を精一杯、密度濃く生きるのだという内実を伴ったものであった。

西川先生の場合、闘病といっても、ただベッドに臥していただけない。旅の好きな先生は、外国に二度も出かけたり、インターンの頃過ごした想い出の信州を訪ねたりしている。あるいは避暑や音楽会にも出かけている。生きることには貪欲だったのだと思う。

読者はきつと、西川先生のこの遺稿を読むことによって、たとえ自分の人生が限りある短いものであることがわかって、こんなにも輝やかしく充実した日々を送ることができるのだという「希望」をつかむことができるに違いない。西川先生は、そういうことを伝えたかったのだと思う。

西川先生の御冥福を祈りつつ、本書の序にかえさせていただく。

昭和五十七年初秋

柳田邦男

